

那 珂 88

— 那珂遺跡群第 186 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1475 集

2023

福岡市教育委員会

那珂 88

—那珂遺跡群第 186 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1475 集



遺跡略号 NAK-186

調査番号 2112

2023

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群の発掘調査報告書は集合住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生中期から中世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いです。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、事業者様をはじめと多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2023年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 石橋正信

例言

- 本報告書は博多区東光寺1丁目地内の集合住宅建設工事に伴って2021年5月17日から2021年7月30日にかけて発掘調査を行った那珂遺跡群第186次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋・田中健が担当した。
- 遺構実測・製図等は屋山・田中が、遺物実測は田中が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 - (2000年) 太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	2112	遺跡番号	401320085	分布地図番号	東光寺 37
開発地地番	福岡市博多区東光寺1丁目334, 336, 337, 348, 351, 352-1, 352-2, 353				
開発面積	1530.55㎡	調査面積	475㎡	調査原因	集合住宅建設
調査期間	20210517 ~ 20210730			担当者	屋山洋・田中健

目 次

I. はじめに	1	3) 井戸	8
II. 調査の記録	4	4) 堀・溝	11
1. 調査の経過	4	5) 掘立柱建物	21
2. 遺構と遺物	4	3. 小 結	23
1) 竪穴式住居	4		
2) 土坑	7		

挿 図

第1図 遺跡分布図 (1/50,000)	2	第12図 SD002、003土層・遺物実測図 (1/40・1/3)	13
第2図 調査地点位置図 (1/4,000)	2	第13図 SD004、005土層・遺物実測図 (1/40・1/3)	15
第3図 調査範囲図 (1/600)	3	第14図 SB01遺構・遺物実測図 (1/60・1/3)	17
第4図 調査区全体図 (1/100) ……折り込み		第15図 SB02、03、04遺構・遺物実測図 (1/60・1/3)	18
第5図 竪穴式住居遺構実測図 (1/40) ・炉土層図 (1/20)	5	第16図 SB05遺構・遺物実測図 (1/60・1/3)	19
第6図 竪穴式住居遺物実測図 (1/3)	6	第17図 SB06遺構実測図 (1/60)	20
第7図 SK009・148実測図 (1/60)	6	第18図 SB07遺構実測図 (1/60)	21
第8図 SK167遺構・土層実測図 (1/60・1/40)	7		22
第9図 SE018遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)	9		
第10図 SE018遺物実測図 (1/3・1/4)	10		
第11図 堀拡大图・SD002土層実測図 (1/200・1/40)	12		

表

表1 遺構一覧表	24・25
----------	-------

図 版

図版 1 調査区全景 (北東から)	図版 5 1. SD005土層B (西から)
図版 2 SD002、SD003 (南東から)	2. SD007土層 (西から)
図版 3 1. SD002北壁土層 (南から)	3. SB05 (東から)
2. SD003南壁土層 (北から)	4. SB07 (南から)
図版 4 1. SC008 (北から)	
2. SE018 (南から)	
3. SD004土層A (西から)	
4. SD005土層A (西から)	

I. はじめに

調査の経過

1. 調査に至る経緯

令和2年（2020年）12月11日付けで博多区福岡市博多区東光寺1丁目334、336、337、348、351、352-1、352-2、353の集合住宅建設に伴う埋蔵文化財有無についての照会（2020-2-779）が経済観光文化局埋蔵文化財課に提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内に位置しており、南西側80mには全長75mの前方後円墳である東光寺剣塚古墳や剣塚北古墳があるなど重要な遺構が存在する地域である。令和3年（2021年）2月9日に重機を使用した確認調査を行い、溝や柱穴などの遺構を確認したため令和3年5月17日～7月30日の期間で発掘調査を行った。発掘調査期間中は休憩場所、電気、水道など事業者及び関係各位のご協力を頂いた。

2. 調査の組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査 令和3年度 ；整理報告 令和4年度）

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長 菅波正人

同課調査第1係長 本田浩二郎（令和3・4年度）

事前審査係長 田上勇一郎

山本晃平（令和3年度）

三浦悠葵（令和4年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 井手瑞江（令和3年度）

内藤愛（令和3・4年度）

調査担当 埋蔵文化財課 屋山洋・田中健

1. 遺跡の立地と環境

那珂遺跡は福岡平野中央を流れる那珂川右岸の低丘陵上に位置する。この丘陵は八女粘土層と鳥栖ローム層からなり、鳥栖ローム層の上面が遺構検出面となる。那珂川に沿って南側には井尻B遺跡や須玖遺跡、北側には比恵遺跡など弥生時代の「奴国」の拠点集落が集中する。那珂遺跡は弥生時代中期以降は丘陵全体に集落が広がり、銅剣など青銅器が出土するだけではなく青銅器生産遺物が出土するなど奴国の拠点的な集落として栄えた。古墳時代前期から中期には那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳が築かれ、古墳時代後期から古代にかけては北側の比恵遺跡で大型掘立柱建物群と柵列が出現する。これは大宰府の前身である「那津官家」と考えられているが、那珂遺跡でも6世紀末～7世紀初頭には瓦が出土するなど三宅関連の施設が存在した可能性が高い。

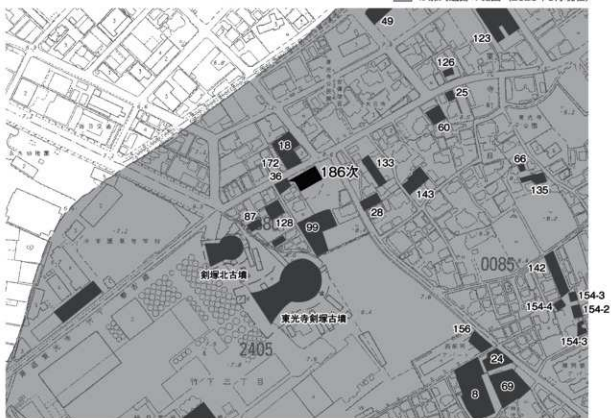
今回の186次調査区は遺跡の北端に近く、比恵遺跡群との境に位置する。南西側80mにいちする東光寺剣塚古墳から続く丘陵尾根部にあたり、周辺よりも標高が高くなっているため畑の造成や区画整理などかなり削平を受けたものと思われる。

※遺跡包蔵地の範囲 (2023年3月現在)

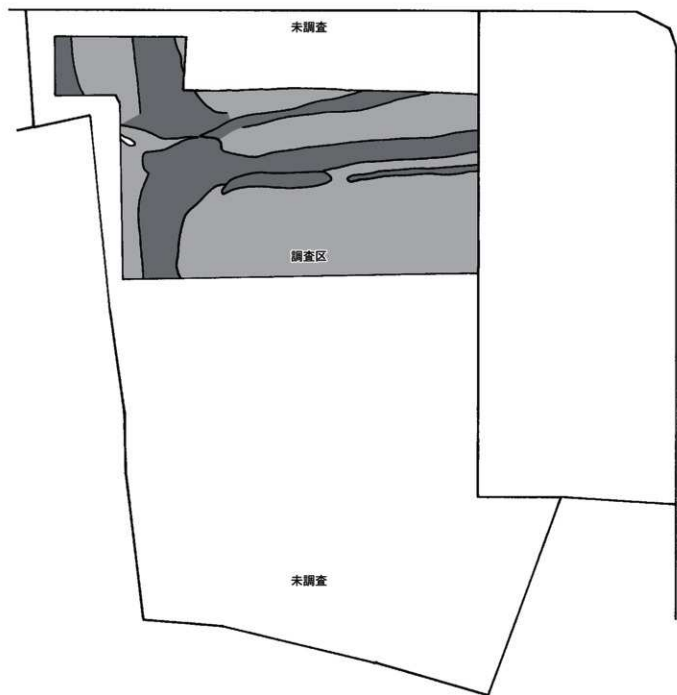


第1図 遺跡分布図 (1/50,000)

■ は那珂遺跡の範囲 (2023年3月現在)



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)



第3図 調査範囲図 (1/600)

II. 調査の記録

1. 調査の経過

申請地の敷地面積は1530.55㎡を測り全体が開発対象となるが、駐車スペースなど掘削を伴わず埋蔵文化財に影響を及ぼさない部分は調査対象から外し、建物基礎により遺構が破壊される部分に絞って調査予定面積は477.46㎡とした。調査時には建物西側が隣接地に接していたので安全のため引きを取ったところ、実際の調査面積は475㎡となった。186次調査区は調査前は長年駐車場として使用されており、ほぼ平坦で標高は北側道路から10cmほど高い8.7mである。鳥栖ルーム上面もほぼ平坦で、現地表面から鳥栖ルームの遺構面までの深さは約30cmである。現地表面から25cm下までが砂利でその下は暗褐色土の包含層が堆積していた。包含層は弥生時代から近世の土器片を含んでいたがいずれも小片で量は少ない。

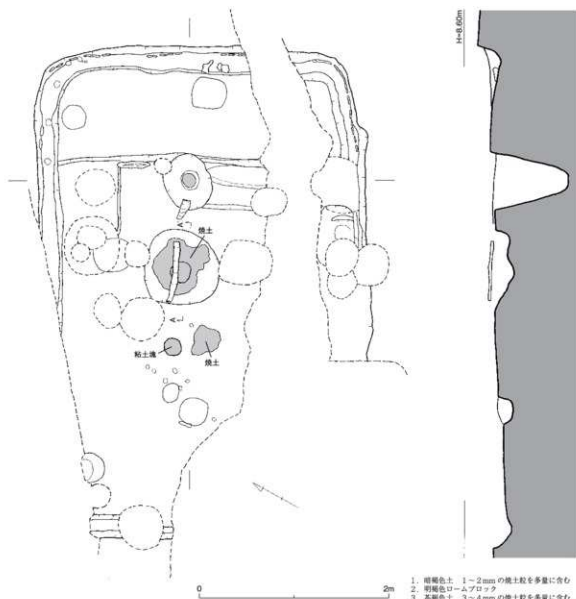
調査は5月17日に機材やコンテナ倉庫を搬入、17～19日に重機を使用して表土剥ぎを行い19日の午後から発掘調査を開始した。調査はまず遺構面が乾燥で荒れないように全面をブルーシートで覆い、東側からブルーシート1～2枚ずつ攪乱を除去しながら全体の遺構検出を行って遺構の分布を把握した。攪乱の掘り下げと遺構検出に6日程かかり、遺構の掘り下げに入ったのは5月28日からである。その後遺構の掘り下げと測量等を行い7月15日に全景写真を撮影した。全景写真撮影時には西端の堀などの掘り下げが終了していなかったため、全景撮影後はそれらの掘り下げと測量を行った。SD002・003の掘り下げには部分的に重機を使用した。7月29日に堀、竪穴式住居とも掘り下げと実測が終了したため7月30日に調査機材と遺物を撤収して調査を完了した。

2. 遺構と遺物

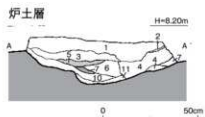
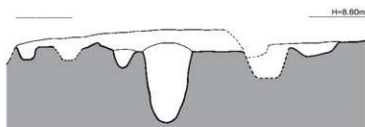
遺構番号は竪穴式住居や溝、井戸、柱穴状遺構などすべてを3桁の通し番号とし、複数の柱穴の組み合わせである掘立柱建物は別に01～07の2桁の番号を付けた。遺構と遺物の詳細は表1（P24～25）に記載した。

1) 竪穴式住居 調査区西端部で1軒検出した。SD004・005に切られる。削平をうけ遺存状態は悪い。

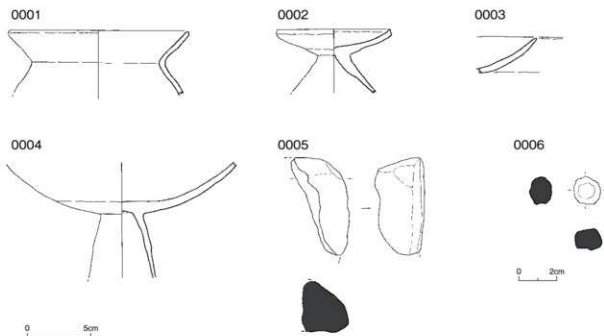
SC008（第5図） 調査区西側に位置する。北西隅をSD004、南縁近くをSD005に切られ、南西隅はSD003に切られる。主軸はN-69°-Eである。東西方向に長い長方形を呈し、長径5.2m、短径3.45mを測る。住居の外周を幅20～26cmの壁溝が巡り、東側短辺に幅1.1mのベット状遺構がつく。検出面ですでにベット状遺構を確認したためベット状遺構の生活面は削平されたと考えていたが、掘り下げていくと低床部より10cmほど上で0001などの土器が廃棄されていた。ベット状遺構は一度低床部と同じ高さまで掘り下げた後に橙色ロームを盛って築いており、その上面に土器が廃棄されていたが、その上に黒褐色土で嵩上げたものである。西側短辺ではベット状遺構を確認できなかったが、幅1m程のベット状遺構を想定すると炉が低床部中央近くに位置することになるため、西側にベット状遺構が存在した可能性は高い。低床部には掘り下げ時の凹凸があり、凹部を埋めるように部分的に貼床を行っていた。主柱穴は2本で東側はベット状遺構に接して掘り込まれ長径59cm、深さは78cm、中央に柱痕跡があり柱径は17cmを測る。西側の主柱穴は攪乱で削平されている。住居外周やベット状遺構と低床部との境に幅2～4cmの細い溝状の掘り込みが断続的にみられるのは板材を打ち込んだ痕跡と思われ、住居壁面やベット状遺構の段差部を板張りにして保護していたと考え



1. 暗褐色土 1～2mmの焼土粒を多量に含む
2. 暗褐色ロームブロック
3. 茶褐色土 3～4mmの焼土粒を多量に含む
4. 暗褐色土 1～2mmのローム粒を多量に含む
5. 焼土
6. 暗褐色土 1～2mmの焼土粒を多量に含む
7. 暗褐色土 わずかに炭化物を含む
8. 暗褐色土
9. 焼土ブロック
10. 黒褐色土 炭化物、焼土粒を多量に含む
11. 暗褐色土 焼土ブロックを含む



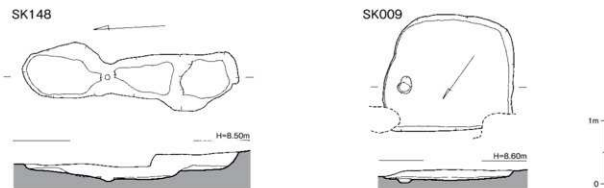
第5図 竈穴式住居遺構実測図 (1/40) ・炉土層図 (1/20)



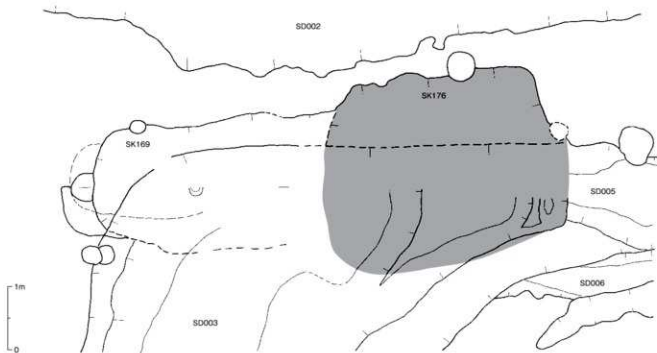
第6図 竪穴式住居遺物実測図 (1/3・0006は1/2)

られる。炉は中央からやや東寄りに位置する。炉は径78cm、深さ18cmの浅皿状を呈し底面は被熱のため赤変している。

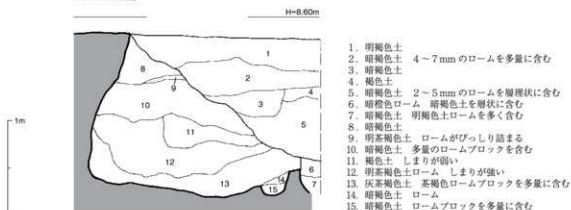
弥生時代後期に多く見られるタイプの竪穴式住居であるが、古墳時代前期の甕片がまとまって出土したため古墳時代の遺構として報告する。表にみられる白磁や須恵器は小片で数も1～2点と少ないため混入である。他には弥生時代中期から後期にかけての土器片が多く出土した。出土遺物(第6図0001～0006)。0001は甕である。復元口径は14cmを測る。全体的に摩滅し調整は不明である。色調は黄白色で多量の白色砂(径1mm以下)を含む。焼成は軟質である。同様の甕が低床部とベッド状遺構から2～3個体分出土したが、遺存不良のため接合できなかった。0002は器台である。坏部は約1/2が遺存しており口径9cm程である。色調は淡橙色で胎土中に少量の白色砂を含む。焼成は軟質で表面が摩滅しており、調整等は不明である。0003は碗か高坏の口縁部である。色調は淡橙色で胎土中に少量の白色砂を含む。焼成は軟質で表面は摩滅のため調整は不明である。0004は高坏である。坏部は1/4程の遺存で口縁端は欠く。色調は内外面とも口縁部は赤褐色、坏底部は淡橙色と分かれる。口縁部の赤褐色は化粧土によるもので内面側の境目は化粧土を指で伸ばしたためやや凹凸が見られるのに対し、外面は底部に坏かなにかを被せて塗ったため境目が明瞭で、端は化粧



第7図 SK009・148実測図 (1/60)



SK169土層



第8図 SK167遺構・土層実測図 (1/60・1/40)

土の厚みで若干の段差が見られる。胎土中の白色砂は1mm程のものが少量、0.5mm以下のものを多く含むほか、若干の雲母片も含む。0005は不明土製品である。平面形は隅丸の方形もしくは長方形、断面は三角か台形と思われる。表面は全面摩滅のため調整等は不明である。色調は浅黄橙色を呈し、径3mm程の砂をわずかに含む。焼成は軟質である。0006は鉄片で低床部から出土した。現状で径14mm、重さ31gを測る。

2) 土坑

SK009 (第7図) 調査区中央部からやや東側に位置する。SD006・007に切られる。平面形は東西に長い長方形を呈し長径204cm、短径182cm、深さ最大15cmを測る。平面形はややいびつで主軸はおよそN-58°-Eを測る。断面は浅皿状で埋土は黒褐色を呈し、2~5cmのロームブロックを層理

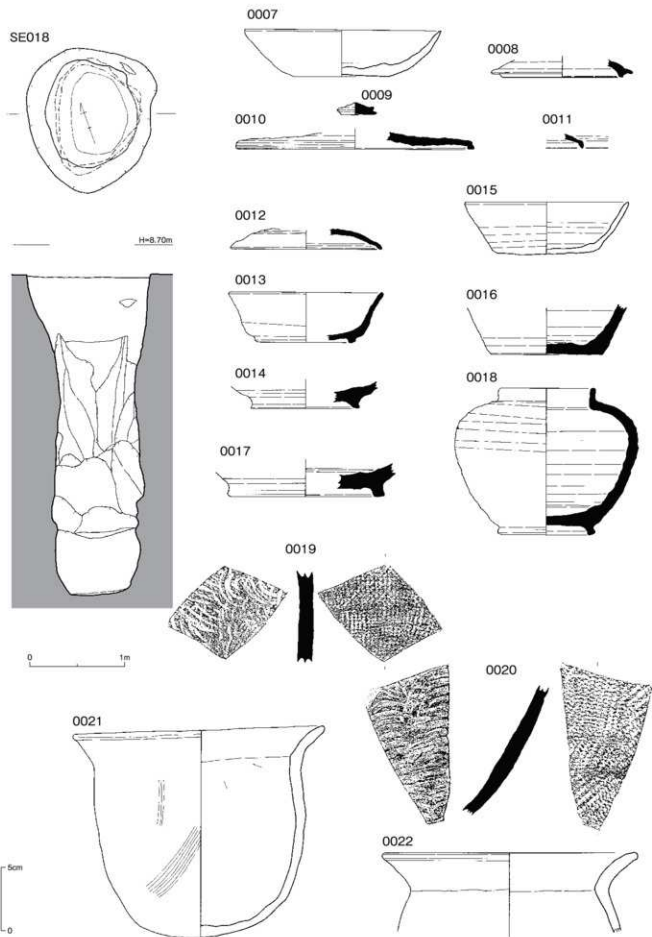
状に多く含む。遺物は弥生時代の土器片が多く出土したほか、5～6世紀頃の須恵器坏蓋片が1点と須恵器大甕の胴部片1点の出土だけで詳細な時期は不明である。古墳時代後期から古代前半の遺構と考えられる。

SK148 (第7図) 調査区中央からやや北西側に位置する南北方向に長い溝状を呈し、古墳時代前期の竪穴式住居であるSC008に切られる。主軸はN-3°-Eを測り、長径339cm、最大幅87cmを測る。中央からやや南寄りにある径23cmの掘り込みに向かって階段状に深くなる。埋土は黒褐色でロームブロックを多く含む。遺物は甕の小片が1点出土した。全体が摩滅して調整等は不明であるが弥生時代中～後期の甕と推定される。

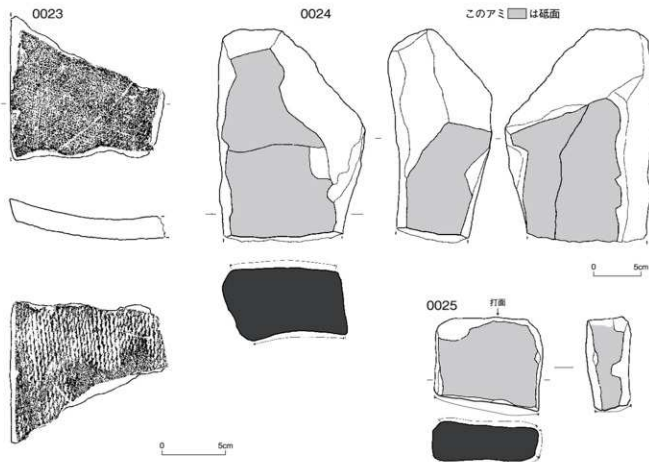
SK167 (第8図) 調査区西端部、SD003の北端隅のコーナー部に位置する。SD003の北西コーナー部が西側に膨らんでいたため半裁して土層観察したところ、SD003に切られる土坑を確認した。平面形は不明だが隅丸長方形と思われる。陸橋をはさんだ北側のSD002の南端隅コーナーが東側に延びるSD004の延長上にあるのに対し、SD003の北隅コーナーが東側に続くSD005の延長上より北側に膨らんで陸橋が狭くなっているのは当初SD003壁面の崩落によるものと考えて調査を行っていたが、第8図上段のSD003底面の方形の窪みからSK167の東側に別の土坑(SK176)が存在したと推定され、それらを一緒に掘り下げてしまったためと考えている。SK167は南北長は約1.8m、東西長は3m程と推定される。主軸はN-71°-E前後を測る。検出面からの深さ1.6mを測り、西側の壁は掘り込み面からフラスコ状に広がる。底面には緩やかな凹凸が見られる。底面で径22cm、深さ26cmの柱穴状の掘り込みを確認した。土層は12・13層は自然堆積の可能性が高いが、その上の8～10層はブロック状の土塊を含む水平堆積で人為的な埋め戻しと考えられる。遺構の性格は不明ではあるが地下式土坑の可能性を考えている。半分は重機による掘り下げで残り半分は手掘りしたが遺物は出土しなかった。99次調査でもSK006・018などの土坑は若干ではあるがフラスコ状を呈して堆積も水平に近い。また006は遺物なし、018も土器小片が1点のみと遺物を持たないなど似た点が多い。

3) 井戸 調査区内で1基確認した。

SE018 (第9・10図) 調査区の中央から北東寄りに位置しSD005に切られる。平面はやや南北に長いびつな円形で長径153cm、短径134cmを測る。検出面からの深さは3.35mで底面標高は5.00mを測る。断面は上端から深さ1.3mまでは緩やかに窄まりそれから下はほぼ垂直に近い。深さ0.7～2m前後では縦方向の浅い溝状の窪みが数条みられる。埋土は検出面近くは暗褐色土で、下層では壁面から崩落した暗赤褐色ロームや八女粘土ブロックを多く含む。遺物は7～8世紀の須恵器が多く出土したほか12世紀の土師坏片(0007)が出土した。ただ12世紀の土器片がこれ1点と少ないことや、井筒がない素掘りであることから土師坏は混入として7～8世紀の井戸とする。出土遺物は須恵器が大甕、甕、壺、高坏、台付坏などまとまって出土した。また須恵器を模倣した土師質の甕や坏蓋も出土したほか、移動式甕や土師甕なども出土している。出土遺物(0007～0025)。0007は土師坏で口縁の1/4を欠く。口径15.4cm、底径7.3cm、器高3.8cmを測る。底面の切り離しは不明で、体部はゆるく内湾しながら立ち上がる。摩滅のため調節は内底部の一部のみしか遺存していない。色調は全体に黄橙色である。胎土は精良で1mm以下の白色砂を多量に含む他3mmを超える小角礫をわずかに含む。焼成は良好である。0008～0012は須恵器坏蓋である。0008は口縁部小片で復元口径9.5cmを測る。色調は暗灰色を呈し、調整は全体に回転ナデを施す。胎土は精良で白色砂をわずかに含む。0009は摘まみで径2.9cmを測る。色調は上面暗灰色、内面灰色を呈す。胎土は精良である。0010は全体の約1/5が遺存する。復元口径は18.8cmを測る。色調は灰色で上面には灰被りの痕跡がみられ



第9図 SE018遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)



第10図 SE018遺物実測図 (1/3・0024は1/4)

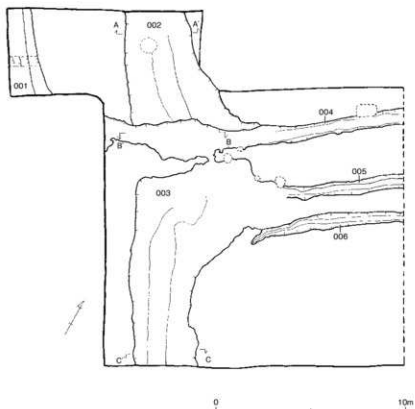
る。調整は全体に回転ナデを施す。胎土は密で精良であるが、粘土の合わせ目に若干の間隙がある。焼成は良好である。0011は口縁部小片である。灰白色を呈し全体に回転ナデを施す。胎土は精良で、白色砂をわずかに含む。0012は口縁部小片である。暗灰色を呈し調整は外面天井部がヘラケズリ、口縁部は両面が回転ナデで内面天井部には静止ナデを施す。胎土は精良で、白色砂をわずかに含む。0013・0014は須恵器高台付坏である。0013は口縁径の1/6ほどが遺存する。灰色を呈し、調整は内底部が静止ナデで他は回転ナデを施す。胎土は非常に精良で白色砂をわずかに含む。焼成は良好である。成形がやや粗めであるが、胎土・調整・焼成とも丁寧な作りである。0014は底径8.4cmを測る。灰色を呈し調整は粗く体部外面はヘラケズリ、内面は静止ナデ、外底部は回転ナデを施す。高台はやや外側に開き「ハ」の字を呈す。胎土は粗く外面側には白色砂を多く含む。0015は土師質の坏で口径12.9cm、器高7.3cmを測る。全体の1/6を欠く。色調は灰色を呈し、調整は表面摩擦のため不明瞭であるが、全体的に回転ナデを施す。胎土は精良で砂等はほとんど含まない。焼成は軟質である。口縁端の一部が暗褐色を呈するが灯明皿のような焼けた痕跡かは不明である。0016は須恵器壺底部である。復元底径8.8cmを測る。全体が灰白色を呈し、調整は全体が回転ナデ、外底部は切り離した後ヘラを使用したナデを施す。胎土はやや粗めで0.5mm程の白色砂をわずかに含む。焼成は良好である。0017・0018は高台付の壺である。0017は外面は暗灰色、胎土は灰白色、内面は赤灰色を呈す。調整は全体に回転ナデを施す。胎土は粗く0.5～1mmの黒色粒を多く含む。焼成は良好である。0018は口縁から胴部にかけて径の1/3を欠く。復元口径は7.6cm、器高11.6cmを測る。口縁部周りと胴の一部、高台外面が黒褐色で後は灰色を呈す。調整は全体に粗めの回転ナデを施す。胎土はやや粗く、1mm以下の白色砂を多く含む。焼成は良好である。0019・0020は須恵器大甕の胴部片である。0019は外面暗灰色、内面青灰色を呈す。調整は外面が席状タキ後に一部ヘラを使用した横ナ

デ、内面は同心円状のタタキを施す。胎土は精良で0.5mm以下の白色砂をわずかに含む。焼成は良好である。0020は外面は灰白色、内面灰色を呈す。器壁断面は外面側の1/2~1/3が灰白色で、外面側に化粧土を貼り付けている。調整は外面が席状タタキ後一部に水平方向の指ナデ、内面は青海波紋状のタタキを施す。胎土は精良で焼成は良好である。0021・0022は土師器甕である。0021は下層から出土した。口縁端のほとんどを欠く。復元口径19.8cm、器高16.7cmを測る。外面は1/3程は鉄分が付着して赤茶褐色を呈す。器壁は灰白色で底部から胴部にかけての一部に黒色のタール状のものが付着する。内面は口縁部が淡褐色、胴部が黄白色を呈し、胴部全面に薄い暗褐色の物質が張り付いている。調整は口縁は内外面とも横ナデで、胴部は外面が縦~斜めの粗いハケ後ナデ消している。内面は上半が斜め方向のケズリ、下半は付着物のため不明瞭だが一部が斜め~横方向のケズリ、後は横方向のナデおよび指オサエか。胎土は粗めで1mm以下の白色砂を多く含む。焼成は良好である。0022は口縁径の1/4のみである。復元口径23cmを測る。色調は暗い黄褐色から黄褐色を呈す。調整は摩滅のためほとんど不明であるが胴部内面は斜め方向のケズリを施す。胎土は粗めで1mm程の白色砂を多量に含む。焼成は軟質である。0023は土師質平瓦である。凸面は黒褐色から暗褐色、凹面は全面に鉄分が付着する、凸面は縄目状のタタキ、凹面は布目匠痕がみられる。端部は水平方向の切断もしくはケズリを施す。胎土には1mm以下の白色砂を多く含むほか2~3mmの白色砂を少量含む。焼成は軟質である。図ではアミ掛けした3面が砥面で残りは破面である。灰白色を呈し一部鉄分が付着している。0025は縦5.4cm、横6.4cm、厚さ3.4cmを測り、6面中4面を砥面として使用している。残りの2面には敲石状の使用痕がみられる。

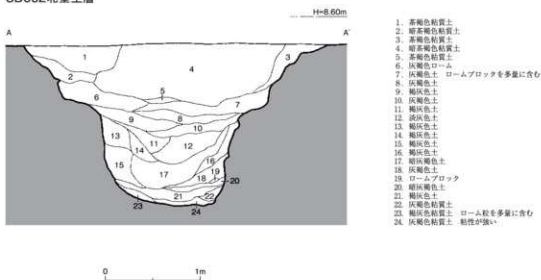
4) 堀・溝 調査区西端で南北方向の堀3条と中央から東側で東西方向の溝数条が出土した。SD001、002、003は居館等を2重に囲む堀で002と003の間は陸橋と推定される。居館とすると堀の東西どちら側が内側なのかは不明である。SD004、005は陸橋部から東側に延びる2条の溝で、道路側溝の可能性が考えられる。

SD001 (第4図) 調査区西端に位置する堀で調査区内での長さ4.7m、幅2mを測る。断面V字状と思われ、深さ60cmまで掘り下げたところで調査区外となり底面に達しなかった。西側隣接地の36次調査では確認されていないため幅は4m以下である。埋土は暗褐色を呈す。須恵器片などが出土した。

SD002 (第11・12図) SD001の東側を平行する堀である。調査区内で確認された長さは8m、幅は北端で3.1m、南端で4mを測る。西縁は南側のSD003の西縁と直線的で方位はN-23°-Wを測る。断面は北端と南端で異なり、北端は東西両側に平坦面を持つ逆凸形、南端は逆台形を呈す。検出面からの深さは1.7mで、底面標高は北端は6.60m、南端は6.70mを測る。土層は北端(第11図)では茶褐色土、灰褐色土、褐色土を多く含むレンズ状の堆積で大きく分けると4つの層(1~2層・3~7層・8~12層・13~24層)に分層できるが、4つの堆積の中でもこまかな掘り直しが見られ、だんだん土が堆積して浅くなりながらも何度も掘り直して維持していたことがわかる。南端の土層(第12図上段)は褐色土~暗灰褐色土を呈し細かなロームブロックを多く含む。大きく6層(1層・2~5層・6層・7~12層・13~17層・18~20層)に分けられるが1層はSD004の埋土で別遺構である。最初レンズ状堆積(18~20層)ではほぼ堀が埋まった後に西側をほぼ底面まで掘り直している。道路を挟んだ北側の第172次調査(福岡市埋蔵文化財調査報告第1412集「那珂83」2021年)で確認された溝001に続くと考えられる。溝001は幅2.2m、深さ1.1~1.5mを測り断面は逆台形

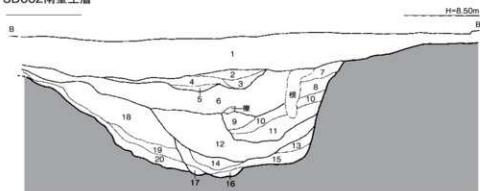


SD002北壁土層



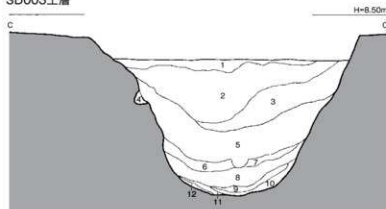
第11図 堀拡大図・SD002土層実測図 (1/200・1/40)

SD002南壁土層



- | | |
|-------------------------|---------------------------------|
| 1. 暗茶褐色粘質土 | 11. 黄灰色粘質土 10層より明るい |
| 2. 暗茶褐色粘質土 ローム粒を全体に多く含む | 12. 灰褐色粘質土 炭化物の粒を多量に含む 粘性が高い |
| 3. 茶褐色土 ローム粒を全体に多く含む | 13. 灰褐色粘質土 |
| 4. 茶褐色粘質土 ローム粒を全体に多く含む | 14. 灰褐色粘質土 12層より暗く粘性が高い |
| 5. 茶褐色粘質土 ロームブロックを多量に含む | 15. 灰褐色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む |
| 6. 黄灰色粘質土 | 16. 暗灰褐色粘質土 |
| 7. 茶褐色粘質土 | 17. 暗灰褐色粘質土 |
| 8. 茶褐色粘質土 ローム粒を多量に含む | 18. 黄灰色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む |
| 9. 黄灰色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む | 19. 黄灰色粘質土 30mm以上のロームブロックを多量に含む |
| 10. 黄灰色粘質土 | 20. 黄灰色粘質土 |

SD003土層



- | |
|-------------------------|
| 1. 黄灰色粘質土 |
| 2. 黄灰色粘質土 |
| 3. 黄灰色粘質土 しまり固 |
| 4. 黄灰色粘質土 |
| 5. 黄灰色粘質土 |
| 6. 黄灰色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む |
| 7. 黄灰色粘質土 |
| 8. 黄灰色粘質土 |
| 9. 暗灰褐色粘質土 |
| 10. 暗灰褐色粘質土 |
| 11. 灰褐色粘質土 |
| 12. 灰褐色土 |
- ※2～8層は含まれるロームブロックの大きさと量で分類した。

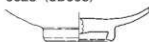
0026 (SD002)



0027 (SD002)



0028 (SD003)



0 5cm

第12図 SD002、003土層・遺物実測図(1/40・1/3)

～V字形を呈す。172次調査では須恵器甕の胴部片や時期不明の土器片が出土しただけで詳細な時期は不明である。186次では龍泉窯系青磁碗Ⅱ類や同安窯系青磁碗の他に天目碗の可能性のある陶磁器が出土している。出土遺物（第12図0026・0027）。0026は須恵器甕口縁である。口縁径の1/8以下しか遺存していないため復元口径は大雑把になるが17cm前後と思われる。灰白色を呈し、全体に回転ナデを施す。胎土はやや粗めで、焼成は良好である。0027は龍泉窯系の青磁小碗で底部の1/3～1/4が遺存する。胎土は灰白色を呈す。軸は薄く色は半透明のオリブ灰色を呈し、細かな気泡を含む。内面は全面、外面は高台外面まで、畳付にもわずかに付着する。外面体部に連弁状になると思われる脹らみがあるが、断定はできない。12世紀後半から13世紀前半頃か。

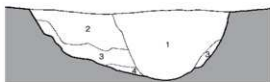
SD003（第12図）SD002の南側延長上に位置する堀で方位N-23°-Wを測る。調査区内での長さ9.8m、南端部の幅2.9mを測る。南端部の断面は逆台形を呈す。深さは南端で1.7mで底面標高は南端で6.75m、北端で6.60mである。002との隙間は陸橋と考えられる。堀の西縁はほぼ直線的であるが東縁は東側に弧を描いてSD005につながる。SD005・006との関係は土層を確認したものの明確な切り合いなどは見られなかった。002に面する北端はSK167によりやや北側に膨らんでいる。北縁中央から東側は更に北側に膨らむこととコーナー底面が周囲より深くなっていることからもう1基別の遺構（SK176 第8図）が切り合っていた可能性があるが、図版2のコーナー部分の土層観察用ベルトでは切り合いは確認できなかった。埋土は褐灰色～灰褐色の粘質土でレンズ状の堆積である。大ききは上下2層（1～3層・4～12層）に分層でき一度上端近くまで埋没した後3層まで掘り直している。底面は灰褐色粘質土で流水の痕跡はない。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類や緑釉陶器片、須恵器大甕の破片が出土したが、いずれも小片である。出土遺物（第12図0028）。0028は青磁碗底部である。軸は薄く色は灰白色を呈し全体に細かな貫入がみられる。外面は畳付から底部にかけてと高台外面の一部が露胎である。畳付から底部に掛けては茶褐色を呈す。胎土は灰白色を呈す。

調査区南端から南東側35mの地点に位置する第99次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第887集『那珂41』2006）では連続する堀はない。中世の遺構としてはSD030やSK010などがあり。特にSK010はSD003の直線上に位置し、方位もN-20°-Wと近いものがあり関連する遺構の可能性はある。

SD004（第13図）SD002の南端部をとる東西方向の溝で東西道路の北側側溝の可能性はある。調査区中央部から東側は緩く北側に曲がる。調査区内での長さ25m、幅0.7～1.2mを測る。底面は東端で標高7.85m、調査区西端では標高8.06mと21cmの高低差があり、西から東に向かって緩やかに傾斜する。断面は浅い逆台形を呈し東端部では北縁沿いにテラスがつく。埋土は褐灰色粘質土でややレンズ状に堆積しており、一度埋没した後には溝の南縁に沿って50～60cm幅で底面まで掘り直している。流水の痕跡は見られないが、底面直上の第4層は粘性が強い褐灰色を呈しており、湿気があると植物が生えた状態であったと考えられる。SD002との接続部を掘り下げる時にはベルトを残して土層観察を行った。第12図上段の土層図で1層はSD004の第1層の続きであるが、図の左側には近代井戸の072があり第6・8層がSD004とつながるのかは判らなかった。遺物は白磁小碗片や陶器播鉢が出土し13世紀後半以降と思われるが、いずれも小片のため詳細な時期は不明である。出土遺物（第13図0029～0035）。0029は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類の底部で底径5.1cmを測る。外面に鎊連弁を施す。軸は厚く半透明な暗いオリブ灰色を呈し、内面は全面、外面は畳付の一部まで施軸する。胎土は灰白色を呈す。0030は須恵器坏蓋である。色調は灰色を呈す。調整は外面天井部から端部近くまでがヘラケズリ、端部が回転ナデである。天井部に連弧状のヘラ記号を施す。内面は全面が静止ナデである。胎土は粗めで1mm以下の白色砂を多く含む。0031は陶器播鉢の底部である。底径の1/4程が遺存する。色調は外面が灰色、内面が浅黄色から灰黄色を呈す。調整は外面胴部が回転ナデ、

SD004土層A

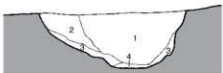
H=8.50m



1. 褐色粘質土
2. 褐色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む
3. 褐色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む
4. 灰褐色粘質土

SD004土層B

H=8.50m



1. 褐色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む
2. 褐色粘質土 1層より細かいローム粒を全体に多量に含む
3. 褐色粘質土 ローム粒を全体に多量に含む
4. 灰褐色粘質土

SD005土層A

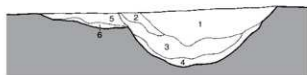
H=8.50m



1. 褐色粘質土
2. 褐色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 褐色粘質土
5. 褐色粘質土
6. 褐色粘質土
密なローム粒の層が交互に堆積している

SD005土層B

H=8.50m



1. 褐色粘質土
2. 褐色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 密な褐色粘質土 ローム
5. 4層と同じ

SD004出土

0029



0030



0031



0032



0035



0033



0034

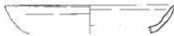


SD005出土

0036



0037



0038



0039



SD007出土

0040



0 10cm

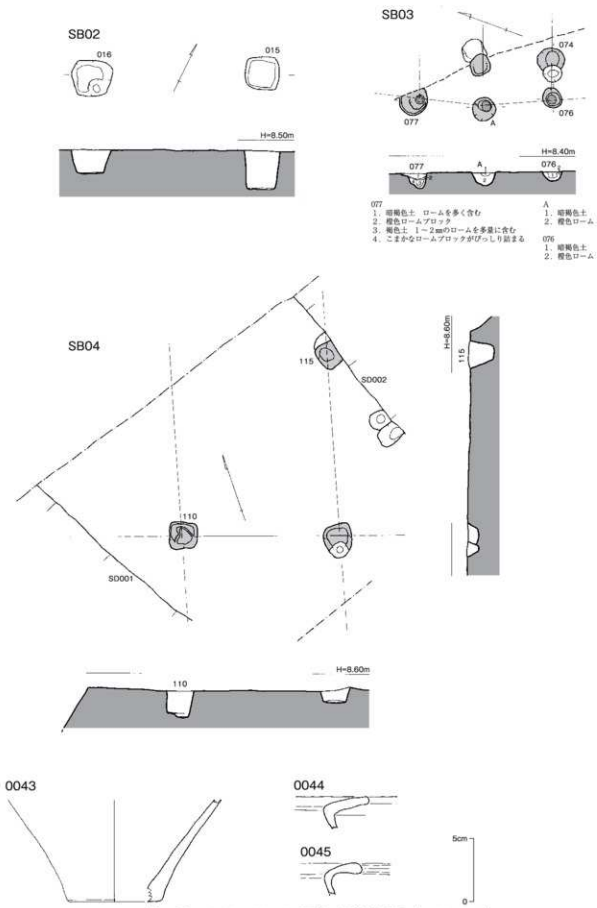
第13図 SD004・005土層・遺物実測図 (1/40・1/3)

底部はナデを施す。内面は摩滅のため7本の節目も消えかかっている。胎土は緻密で中央が浅黄色で両面はやや灰色が強い。0.5mm程の白色砂を少量含む。焼成は良好である。0032は土師質である。色調は内外面とも煤のためか黒褐色で、胎土の橙色が透けて見える。胎土には0.5mm程の白色砂を少量含む。調整は外面が横ナデ、内面は口縁端に斜め方向のハケを施した後、横ハケを施す。焼成はやや軟質である。0033・0034は土師環である。0033は口縁径の1/5程遺存する。復元口径は7.6cmを測る。色調はにぶい黄褐色で、胎土には1mm以下の白色砂と細かな雲母片を含む。調整は摩滅のため不明である。底部切り離しは糸切りと思われる。焼成は軟質である。0034は底部の1/2弱を欠き底径6.9cmを測る。全体に赤褐色を呈し、胎土には1mm程の白色砂を多く含む。調整は摩滅のため不明で、底部切り離しも不明である。0035は土師質の平瓦で厚さ2.1cmを測る。色調は灰色で胎土には1mm程の白色砂を多く含む。調整は全体に丁寧なナデを施す。

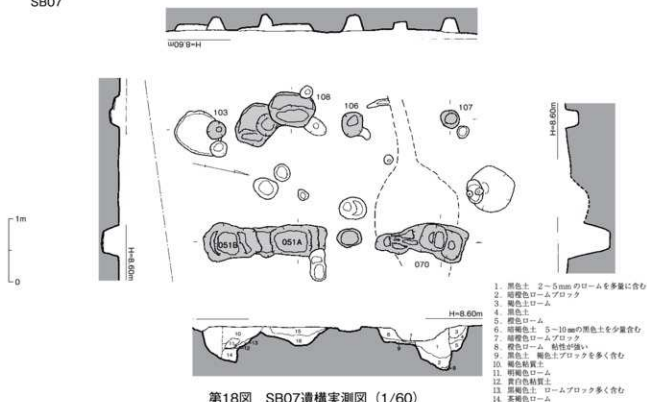
SD005 (第13図) SD003の北端から調査区中央を東側に延びる溝で道路の南側側溝の可能性がある。緩やかに蛇行して計測しにくいが主軸はN-65°-E前後である。調査区内での長さは約20m、幅は1.7m前後を測る。南縁に沿って深さ5~8cmの浅い平坦面があり、北縁に沿って深さ40cm程と深くなっているが、土層図からは最初の溝が埋没後に逆台形の部分を掘り直したことが判る。底面は東端で標高8.16m、SD003との接続部近くで標高7.92mと東側が24cm高く、SD004とは逆に東から西側に向けて傾斜している。埋土は褐色粘質土で大きく1・2~4・5・6の3つに分けることができる。流水の痕跡はみられない。最下層は若干灰色かかり粘性が強いいためやや湿り気を帯びて植物が生えた状態であったと考えられる。調査区中央から西側は南縁をSD006に切られる。遺物は龍泉窯青磁片や白磁片のほか瓦質鉢や底部が糸切り離しの土師環と皿が出土している。詳細な時期は不明であるが12世紀中頃以降と考えられる。出土遺物(第13図0036~0039)。0036は須恵質の盤と思われる。底径の1/8程の遺存で復元底径は14cm前後と思われる。色調は全体に灰色を呈し、胎土は精良で0.5mm以下の白色砂を含む。調整は外面が胴部が回転ナデ、底部が指ナデで内面は胴部から底部端が回転ナデで底部中央は静止ナデを施す。焼成は良好である。0037~0039は土師環である。0037は小片で色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土は精良で1mm以下の白色砂をわずかに含む。調整は摩滅のため不明である。0038は全体の1/3と口縁端の多くを欠く。復元口径11.8cm、器高2.6cmを測る。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土に1mm以下の白色砂と赤色粒を少量とこまかな雲母片を多量に含む。調整は摩滅のため不明で、底部切り離しは糸切りである。焼成は軟質である。0039は外面赤褐色、内面灰白色を呈す。外面は口縁の8mm下の稜線からは内湾しながら立ち上がる。胎土には1mm以下の白色砂と微細な雲母片を多く含む。底部切り離しは糸切りである。焼成は軟質である。

SD006 (第4図) 調査区中央部に位置し、SD005を切る。東側の延長上にSD007が位置する。主軸は中央から東側がN-71°-Eで中央から南側は緩やかに南側へ曲がる。西端部では南西隅から尻尾状に90cm程突き出している。溝の東端では南側縁に沿ったテラスがつく。もともとは深さ20cm程の溝を40cmほどに掘り直したと考えられるが、古く浅い溝がSD003の東縁につながるのに対して掘り直した溝はSD003の手前で屈曲して東縁に沿う。底面標高は西端で約8.2m、東端で8.1mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は土師質の描鉢や鉢、底部糸切り離しの土師環などが出土したが、いずれも小片で詳細は不明である。13世紀後半以降と考えられる。

SD007 (第4図) 調査区東側に位置する東西方向の溝である。SD006の延長上に位置し、主軸はN-66°-Eを測る。調査区内での長さ10.5m、幅は38~60cm。底面標高は東端で8.18m、西端から2mの地点で8.0mを測り東側から西に向かって深くなっているが、それから西端に向かって浅くなって立ち上がる。断面は逆台形を呈す。埋土は褐色粘質土で埋没後に掘り直しを行っている。第3層



第15図 SB02・03・04遺構・遺物実測図 (1/60・1/3)



第18図 SB07遺構実測図 (1/60)

5) 掘立柱建物

SB01 (第14図) 調査区の南東部に位置する2×3間の掘立柱建物である。主軸はN-29°-Wで、桁行き6.5m、梁間4.0mを測る。柱間は芯々で1.7~3.1mである。桁行き中央(030と031、024と025)の間隔が3.1mと広く、その他の柱間は南北方向が1.7m、東西方向が2.0mである。柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し径31~43cm、検出面からの深さは20~32cmを測る。柱穴10基のうち2基(030・031)で柱らしき痕跡を確認した。柱痕跡は20cm程である。その他の021や025~029では柱を抜いた痕跡があり、021、024、026では橙色ローム層と黒色土層による版築を確認した。遺物は029と031から須恵器片が1点ずつ出土した他は、時期不明の土器片が少数出土したのみで詳細な時期は不明である。出土遺物(第14図0041・0042)。0042はSP024から出土した須恵器杯蓋の天井部から体部にかけての小片である。色調は灰色を呈す。胎土は細いが若干のスが見られる。1mm以下の白色砂を少量含む。調整は外面がヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。

SB02 (第15図) 調査区の東端部に並ぶ2基の柱穴状遺構である。周囲の柱穴に比べて平面形は長方形で深さももしっかりとした掘方だが周囲に同規模の遺構が存在しない。2本柱壱穴式住居の主柱穴などであろうか。主軸はN-65°-Eで、015は径が54×52cm、深さ65cmを測る。016は径64×59cm、深さ54cmを測る。柱穴間は2.7mを測る。柱痕は確認できなかった。遺物は015から弥生時代中~後期の壺片が、016からは器台、甕など弥生時代の土器片が出土した。出土遺物(第15図0043~0045)。0043は甕である。色調は赤褐色を呈す。胎土は精良で1mm以下の白色砂を少量含む。摩滅のため調整は不明瞭であるが、外面は縦方向のミガキカナデである。外面には赤色顔料を塗布していた痕跡がわずかに残る。焼成は軟質である。0044・0045は甕口縁である。両方とも小片で口径は不明。色調は赤褐色を呈し、胎土は粗く1mm程の白色砂を多量に含む。調整は摩滅のため不明で焼

成は良好である。

SB03 (第15図) 調査区西端中央に位置する。建物の東側をSD003に切られ、現状では1×2間であるが本来は2×2間以上の総柱建物である。主軸はN-18°-Wを測る。南北2.0m、東西0.6mを測る。柱間は芯々で0.6~1.0mである。柱穴の平面形は円~楕円形を呈し径32~43cm、検出面からの深さは14~27cmを測る。遺存する柱穴5基のうち3基で柱痕を確認出来た。柱痕径は12~15cmである。遺物は077から弥生時代中~後期の甕片が1点出土した他は時期不明の土器片が数点筒出土しただけで詳細な時期は不明である。

SB04 (第15図) 調査区の北西端に位置する。建物の北半がSD002に切られ現状で1×1間の建物である。主軸はN-6°-Eで南北2.8m、東西2.5mを測る。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し径41~48cm、検出面からの深さは16~43cmを測る。遺存する柱穴3基のうち柱痕を確認したものはなかった。遺物は115から須恵器大甕の胴部片が1点出土したほかは時期不明の土器小片が少数出土しただけで詳細な時期は不明である。

SB05 (第16図) 調査区の中央からやや南西寄りに位置する。北西側をSD006に切られるなどして不明な点があるが2×3間の側柱建物で東側に1間分の廂がついた建物と思われる。主軸はN-20°-Eで、桁行き3.9m、梁間2.8mで廂の幅が1.0mを測る。柱間は芯々で0.9~1.7mである。柱穴の平面形は円形もしくは不整形楕円形を呈し径15~73cm、検出面からの深さは8~79cmを測る。遺存する柱穴14基のうち8基で柱痕を確認出来た。柱痕径は8~21cmである。129や135ではローム層と黒色土層による版築を確認した。遺物は130、132、136から須恵器片が出土した他、127から古代の甕の破片、129から移動式竈の破片が出土した。詳細な時期は不明である。出土遺物(第16図0046)。0046は土師坯の口縁部である。復元口径は約14cmを測る。色調は外面から内面口縁端までが暗灰色で内面は褐色を呈す。調整は回転ナデを施し、胎土は1mm以下の白色砂を少量含む。焼成はやや軟質である。

SB06 (第17図) 調査区南東端のSB01の建物内(第14図)に位置する。同一の建物である可能性もある。主軸はN-18°-Wを測る。柱間は東西が2.5m、南北が2.3mを測る。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し径34~43cm、検出面からの深さは43~57cmを測る。151等で柱痕跡を確認した。柱痕径は16~18cmである。1×1間の掘立柱建物か、もしくはSD010と関連づけて堅穴式住居の主柱穴と壁溝と考えている。遺物は010と151から時期不明の土器片が1点ずつ出土したのみで時期は不明である。

SB07 (第18図) 調査区中央から南側に位置する南北に長い1×3間の建物である。主軸はN-12°-Wを測る。桁行き4.1m、梁行1.9mを測る。東側の柱列は中央に径40cmの柱穴状遺構があり、その南北両側に溝状の掘方が並ぶ。北側は幅53cm、長さ138cm、南側は幅62cm、長さ191cmを測る。南北両側とも中央に近い方が浅く、端の方が深く近い方の掘方を切っている。西側の柱列は溝の掘方が浅かったのか元からなかったのかは不明であるが、東側の柱列に対応する掘方があるため一連の遺構と思われる。柱痕跡は確認できなかった。遺物は106から古代前半の土師甕片が1点出土したのみで後は時期不明の土器片のみのため詳細な時期は不明である。

Ⅲ. 小結

186次調査では弥生時代・古墳時代前期・古代前期と古代末～中世の溝と集落が出土した。遺物量が少なく、また素焼きの土器は表面が摩滅しているため時期が特定できた遺構は少ない。

調査で確認できた最も古い遺構は弥生時代中期の遺構である。弥生時代と思われる土器片が出土する柱穴状遺構は多いものの、遺物は器種が不明の土器小片が数点だけで確実に弥生時代に属するとは断定できない。しかし後世の遺構からは弥生時代の土器片が多く出土していることから元々は多くの遺構が存在したものが後世に削平されて消滅したものと考えられる。古墳時代の遺構は前期の竪穴式住居（SC008）が1軒出土した。長径5m程の長方形を呈し、短辺にベッド状遺構がつく。主柱穴は2本柱である。弥生時代後期に多く見られる形状ではあるが、古墳時代前期の臺などが出土したため古墳時代の遺構として報告した。遺構一覧表にみられる白磁や須恵器は小片で数も1～2点と少ないため混入と考える。調査区内で確認されたのが1軒のみであることや、後世の遺構からも古墳時代前期と思われる遺物の出土は少ないため、元々遺構数は少なかったものと思われる。

古代から中世にかけての遺構は大きく2時期に分けられる。前期は主軸がN-18°-E前後もしくはそれに直行する遺構で、溝はSD034・081、掘立柱建物はSB03・04・05などである。ただSB05はSD003の東岸コーナー部に平行するため後期である可能性も捨てきれない。これらの遺構からは明確な時期が判明する遺物が出土していないため詳細は不明である。後期はSD002・003などで主軸がN-23°-Wと前期に比べ40°程西に振れる。この時期には溝がSD001～007が掘られ、それに伴う掘立柱建物としてSB01がある。後期の遺構からは龍泉窯系の青磁片や糸切りの土師坏・皿の他、播鉢などが出土しているため古くとも13世紀中頃と考えられる。前期は主軸が南北を意識して作られておりまだ古代官衙的な意識が残っているが、後期はおそらく等高線に沿った堀と溝で区画することに大規模な労力をつぎ込み、それに沿って建物が配置されている。またSD004と005では004が西から東、005が東から西へ傾斜しており、堀への水の出入りを調整するなど計画性が高かった可能性がある。今後周辺の調査により堀の性格や規模が明らかになることが期待される。



調査区全景（北東から）



SD002, SD003 (南東から)



1. SD002北壁土層（南から）



2. SD003南壁土層（北から）



2. SE018 (南から)



4. SD005土層A (西から)



1. SC008 (北から)



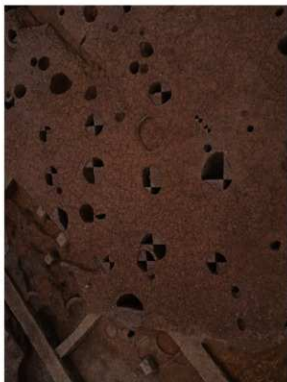
3. SD004土層A (西から)



1. SD005土層B (西から)



2. SD007土層 (西から)



3. SB05 (東から)



4. SB07 (南から)

報告書抄録

ふりがな	なか88							
書名	那珂88							
副書名	那珂遺跡群第186次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1475集							
編著者名	屋山洋・田中健							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2023年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
那珂遺跡	博多区東光寺1丁目 334、336、337、 348、351、352-1、 352-2、353	40132	85	33°	130°	20210517 ～ 20210730	475㎡	記録保存
				34'	25'			
				28°	58.1°			
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落	弥生中期～ 近世	堅穴式住居・土坑・ 井戸掘立柱建物・堀		弥生土器・須恵器 ・土師器・陶磁器			
要約	<p>弥生時代中期から中世の集落を確認した。いずれの時代も遺物が少なく時期の特定は難しい。弥生時代は時期を確認できた遺構は少ないものの後世の遺構からは破片が多く出土しており、削平をうける前は遺構が多く存在したと思われる。古墳時代は前期の堅穴式住居1軒と柱穴等、古代前期は井戸が基出土した。古代後半～中世初期になると堀と溝、掘立柱建物が見られるようになりそれらは2時期に分けられる。堀と溝は周辺の調査でも多く確認されているが東光寺剣塚など古墳に属するもの以外は中世後半に属するものが多い。今回の調査で確認した堀や溝ではいずれも中世前半の遺物が多く、中世後半に属する遺物はほとんど出土しておらず時期差があるものと思われる。調査区は丘陵の尾根部分に当たり周辺より高くなっている。鳥栖ロームも最上層は残っていなかったため、畑の工作や大正以降の区画整理によって多くの遺構が削平をうけたものと思われる。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1475集

那珂88

- 那珂遺跡群第186次調査報告 -
令和5(2023)年3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目16-24